東　京　国　税　局　長　賞

未来を照らす「税金」の存在

山梨市立山梨南中学校　３年　大崎　梨咲子

私は税金という言葉からイメージするものは「人助け」である。近年ようやくコロナウイルスもおちつきはじめ、いつも通りの日常が戻ってきた。これも多くの医療関係者の努力、ワクチン接種につとめた国の努力、そして多くの人がそれに立ち向かった結果である。日常の生活は多くの人々、そして大人の人が納める税金で支えられていると、改めて知ることができた。

しかし、もしコロナウイルスがほとんど感染することがなく、日本国内に数人しかかかることのない病気だったらどうだろう。その治療に多くの人が目を向けただろうか。私の祖父は、ＡＬＳという病気で亡くなってしまった。ＡＬＳとは 10 万人あたり 2.2 人の人が患うといわれる難病であり、未だ根治的な治療薬がない。その一方で遺伝子研究や再生医療などといったもののＡＬＳ研究は日々進歩していっている。それらを活用することによって病気の進行を遅らせることが可能になっていくという。私はこの話を聞いたとき、税金というものは、「人助け」のためにあるべきだと考えた。まだ研究段階で研究するためにはお金が必要だ。研究したからといって、必ず治療が約束されるわけではない。そこにお金を使うのはおかしい、と思う人もいるだろう。でももしいつか治療法が見つかって、将来助かる人が増えたら、あれは無駄では無かった、祖父の死も無駄ではなかった、と考えられる日がくるかもしれない。未来をよりよいものとするため、人を助けていくシステム、それが私たちが支払う税金なのだと思う。難病の研究だけではない。私たちが行っている勉強に税が使われているのも、将来よりよい日本を作る担い手として、今の子供たちが成長するのを思ってのことだ。それを考えると、今の生活をがんばって生きようと思うことが大切なのだと私は思う。

税と聞くと多くの人が「無駄だ」「必要ない」と言うだろう。減税を求める声も多く減税をすることにより、人の暮らしの負担が減るのも事実だろう。しかし今回考えてみた税金の使い道を見つめてみると未来への投資となる税金にかけてみることで、今の日本の一億人もの人々の未来をあかるく照らすことができそうだ。私たちが普段何げなく払っている税金の使い方に目を向けること、それは日本に住む私たち一人一人の未来を考えることなのではないだろうか。私はこの先もっと税と触れ合う機会が増えるだろう。その時大切なのは私たちが未来を担っていることを忘れないことだ。これまでの義務教育の過程においてそしてこれから子どもを学校に通わせるときや、病気にかかり助成金をもらうなど大人になっても税金に支えられることはたくさんある。私たちを支え続けてくれる税金について興味を持ち深く知る、そして大切に扱うことが未来について考える「人助け」となるのではないだろうか。